6/14 福祉講演会　「医療・施設中心から地域へ」の地域でできることは何か？

講師　児玉　克己氏（社会福祉法人　中央有鄰学院　常務理事）

高齢社会白書より、日本の高齢者を取り巻く状況の説明がありました。人口減、高齢者の割合が高まり、医療・介護施設では、受け入れしきれなくなると。

医療・介護の費用を少なくするため、

特別養護老人ホームには、要介護３以上しか入れなくなる動きが。

ホームヘルパーの生活支援も、例えば今まで1000円だったものを、500円にしようと言う動きもある。そうなると介護事業者は仕事としてなりたたなくなり、結局しわ寄せは、高齢者の家族にかかってくる。

白書によると、

一人暮らし世帯の男性の28.8％が「日常、会話がない」

20.0％が、「大型ごみを出す、電球の交換などの日常必要な作業で頼れる人がない」

と答えている。

そこで

社会福祉のまちづくりの視点

一人一人を独立した人格として、その尊厳を重んじ、共に人格的に成長する場としてのまちは乳幼児から高齢者までが共存する主体となる。

　　１　人間として豊かに生きていくと言うことを保証する。

　　２　人間の存在の保証が他者とのかかわりの中で形成される

具体的に何をするのか

　「できることを、できる人が、できるところで、できる時に支援すること」

まずは

　地域の人に　声かけ＝気にする　　難しいけれどやっていかないといけない。少しずつ。

　このまちで最期まで住み続けたいなら、SOSを出す勇気をもつ

　周りの者はこのSOSをキャッチする・・・ほんの少しのできることをする・・・「ささえあいの家」がその拠点なる。拠点となるようみんなで育てる。・・・「ここは安心して住めるまち」と思ってもらえるようにする

地域住民の相互の助け合いをいかに具体的に進めていくかが、これからの、課題だと感じました。